

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	高橋光子 早期修了予定者 【比較社会文化学専攻 平成25年度生】	要 旨
論文題目	文法化についての共時的・通時的研究 —日本語と英語の修飾語の分析—	<p>本論文は、日本語や英語の副詞や形容詞について、用例に基づく実証的な手法で、共時的・通時的文法化の諸相を明らかにすることを目的としている。「文法化」とは、言語が音声・形態・意味面での言語的実体を喪失して抽象化していく歴史的な言語変化を表す。たとえば具体的な内容語から抽象的な機能語が派生するのは、その典型的な特性である。本論文では、まず「決して」について、多くの用例をもとに、詳細に共時的・通時的文法化の特性を分析している。次に否定副詞の「構へて」と hardly についても、同様に分析を試みている。その結果、これらの副詞はいずれも、語彙的意味の希薄化・漂白化、音声的・形態的言語実体の削減、統語的・文脈的変動性の消失などの通時的文法化の特性が示されることを例証した。加えて日英の比較対照的考察によって、否定副詞の文法化の共通点や相違点を分析している。次に「重ねて」について、「イメージ・スキーマ」を用いて、派生や語義変化の中にある類似性や近接性を説明している。特に共時的文法化については、英語や日本語の形容詞や副詞の具体例を多く挙げながら、全く異なる意味領域間の類似性や近接性について分析し、具体的な意味を持つ語を基に、抽象的で主観的な意味を派生語へと写像する認知能力としてのメタファーについて、詳しく考察している。</p> <p>以上これらの具体的な例の検討から、文法化は多くの言語変化のうちの一つのかたちであること、イノベーション（造語）は、一般化しなければ共時的文法化には至らないこと、そして、副義が想起されやすい一般的な基本語彙が文法化の対象となることなどを、文法化現象の中心的な内容であると結論づけている。</p>
審査委員	(主査) 高崎みどり教授	
	森山新 教授	
	山腰京子 准教授	
	中西公子 准教授	
	加納なおみ 助教	